京都の美術

京都の絵画（鎌倉時代まで）

京都の美術はやはり宗教美術が中心となる。仏画が京都に定着する以前の巨石文化である古墳には絵画を見出すことはできない。

絵画は奈良時代の「絵因果教」が上品蓮台寺に残るが、平安京の建都以後の作品が主となる。

空海は中国より真言密教の秘法を伝え、真言宗の祖師像を描いた盛唐の画家李真らの「真言五祖図」を東寺に残した。また、世界が数多くの仏によって創られることを表現する両界曼荼羅（胎蔵会・金剛界）図の中で、現存日本最古の神護寺「高雄曼荼羅」は空海の請来手本をもとに紺紙金泥で描かれている。密教僧は図像を書くことが修行として課せられ、醍醐寺には「別尊曼荼羅」など密教図像が数多く伝えられている。

藤原頼道は、極楽浄土の宮殿を表わす平等院鳳凰堂を建て、扉には来迎する阿弥陀をわが国の景色の中に表現させた。

一方、高山寺には猿や蛙などを人間に見立てた絵巻物「鳥獣人物戯画」が残る。

平安末期から鎌倉時代にかけて「似絵」と呼ばれる肖像画が描き出された「源頼朝像」「平重盛像」と伝える作品は神護寺にあり、中国に学んだ禅僧が師の姿を書かせた頂僧図が東福寺などに残る。禅林寺や知恩院には極楽往生を願って書かれた「山越阿弥陀図」やスピード感のある「早来迎図」が伝わる。また、宮廷の絵画を管理する絵預所の土佐派の絵師や絵仏師など専門的画家が誕生した。